

Outram Secondary School 訪問(8月23日)

聖徳学園中学・高等学校 教頭 竹内 一樹

1 はじめに

私立学校教員海外研修団は、2023年8月23日、視察先である Outram Secondary School を訪問した。この学校は、歴史あるシンガポールの公立学校の一つであり、近年では特徴的な教育を実施している。また、原則的にシンガポールの公立学校は一般(保護者等にも)に公開することはされておらず、非常に貴重な機会となった。

2 学校概要、教育環境

「Outram」いう名前はイギリス人の名前に由来しており、2006年に100周年を迎え現在117年目の Secondary School (日本での中学校に相当)である。シンガポールにおいて、長い歴史を持つ公立学校の一つである。第2次世界大戦までは、Primary School (日本での小学校に相当)として運営され、以降は Secondary School として、



Outram Secondary School のエントランス

シンガポールの公立学校では珍しくビジネス関連の教育を提供している。スクールビジョンを「Lifelong Learners (生涯学習を実践する者)」「Innovative Leaders (革新的な指導者)」「Caring Contributors (思いやりのある貢献者)」とし、「Sense of Belonging (帰属意識)」「Perseverance (忍耐)」「Integrity (誠実)」「Responsibility (責任)」「Innovative (革新)」「Teamwork (協働)」に価値をおき教育を行なっている。校舎等の施設は、一般的な日本の学校と同じであるが、ICTの設備は日本の先進校と同様の環境である。

3 視察内容

(1) Presentation by Principal

まず初めに、校長である Keith Tan 氏よりシンガポールの教育、Outram Secondary School の特徴的な教育内容について、以下の説明を受けた。

① シンガポールの教育について

未来にフォーカスし様々なステージで活躍できる人材の育成に力を入れている。学校に通う期間と進路選択の際だけではなく、生涯にわたって教育が役立つように生徒をサポートしている。また、海外の生徒に対してもシンガポールの教育を提供し、多くの生徒に学習の機会を与えている。その根底に

あるのは、資源などが少ない国にとって、教育は重要な国家の成長を担う政策であるとの国家の考えがある。また、高齢社会をむかえるシンガポールにとって、今後必要になってくる政策の一つが教育でもある。

② Outram Secondary School について

自信を持ち自ら学び、社会貢献が行えるようになること大切にしている。また、学業以外の課外活動（教室以外の場所で）で人間同士の関係を学ぶことも大事にしている（放課後の課外活動が日本と同様に実施されており、盛んに行われている）。在籍生徒の 65%が中国系、20%がマレーシア系、5%がインド系となっており、多様性を重視し人種や宗教間のハーモニーを得られるよう指導している。シンガポール教育省（MOE）がここ 2 年間掲げ力を入れてきた「自分の成功と社会への貢献を結びつける」教育を実践するため、「卒業後の 50 年」「リーダシップ」「世界貢献」「自分の強み」「貢献者」などを指導のテーマとしている。現在実施している主要な学校プログラムは、「教科でなく人や市民を教える Character and Citizenship Education（CCE）」、「最先端の STEM 教育などを行う Applied Learning Program（ALP）」、「ラーニングイベント（スピーチデイ、キャリアガイダンスデイなど）」、「スポーツイベント（フィットネスラン、スイミングカーニバルなど）」の 4 つである。

※教育ビジョンや重視する価値などについて、このセクションで説明があったが、「2 学校概要、教育環境」に表記した。

(2) Conversation with School team

Tan 校長のプレゼンテーションの後に情報交換が行われた。特に視察員からの質問が多数あり、「かぎ括弧」で示した内容に関する質問がなされ、Tan 校長が答える形となった。

① 「ビジネスクラスでの企業との連携」について

学生の企業訪問、メンタープログラムなど多数実施している。興味を持ってくれる企業とパートナーシップを結んでおり、特に卒業生や同窓会とのコネクションを大切にしている。ビジネスクラスは CCE の一環（13 歳から行なっている）として行われ、公立では唯一ここだけで設定されたクラスである。このようなプログラムに「人助けや貢献のエッセンスを教育に取り入れている」のは、試験の結果だけではなく学校や社会での幅広い目標やその達成を意識し、様々な学生の要請に応えられるようにしているためである。多くの学生が学校や社会でどれだけ貢献できるのかについては政府の指針でも示されている。「奉仕・貢



情報交換の様子

献活動」については、学校としては適切な団体を選ぶことを重視し、自校のイベント運営、慈善・奉仕活動（団体に対してヒアリングを実施し活動を決定）などを中心に実施している。この指導計画等を実施するうえで「公立学校での裁量権」は一定認められている。特に方法やタイミングは実施校が選ぶことができ、学校の意見は尊重され、実施の事前準備が十分であれば原則許可が出る。

② 「教科指導」等について

シンガポール教育省（MOE）は、教科ごとに指導する方針をとっている。しかし、現場の教育者としては、様々なシチュエーションで必要なことをその都度に教えることが大切だと感じている。私（Tan 校長）は数学が専門だが経済についての知識もあり、大統領選での一票の大事さを教えることもできる（9月1日がシンガポール大統領選であったためこのような発言になった）。

「試験に関する影響」について、アジア圏では試験を重要視するため、生徒の大きなストレスやプレッシャーになっており、シンガポールでも同様である。これからは試験だけに重きを置くのではなく、生涯に対する学びを重要視することが肝要である。マインドセットを変え、帰属意識や行動意欲などの素質を見極めことも大切である。試験は次に進むために必要だが、貢献する素質の方も大事だと考えているおり、そのバランスを考えていきたい。また、不登校生徒は一部おり、教師ではない職員が家庭訪問でヒアリングを実施し、家庭の問題を明らかにしてコミュニティパートナーが専門職に繋げている。保護者の失業やヤングケアラーなどの家庭の問題が多く、学校だけではなく、社会問題としてチームで解決する。「Primary School から Secondary School に進学する際」には、トラディッションサポートがあり、学習に困難等がある場合は情報共有を学校間で行なっている。

最後に、視察員の所属する学校の紹介を行った。

(3) 生徒との交流・授業体験

① Entrepreneur Club Activity

2グループに分かれて生徒（13 から 15 歳の混合クラス）作製のゲームを体験した。グループ1は保険のゲーム。5つの保険のプランが提示（例えば交通事故に遭って重症になったとしたらどの保険に入っていたら良いのか）され、より自分に適している保険のプランについて3択で答えていく。グループ2は双六（写真参照）。クイズを解きながらゴールに向かう。クイズの内容はファンディング（資金調達）に関わるもので、資料のヒントを参考にしながら3択で答えていく。実際の知識や手法を知識として覚えるだけでなく、ゲーム上で楽しく理解するように工夫することによって、学んだ知識をさらに深め活用する様子が伺えた。



生徒作製のゲーム

② Robotics activity

生徒たち(14歳)からコーディングを教わりロボットを動かす体験をした。教材(Quirky)の説明とコーディングの行い方を生徒からプレゼンテーションにて説明を受け、視察員が2人1組でコーディングを行い(生徒がサポート)ロボットを実際に動かした。実際に現場で指導にあたっている教諭からこの授業はコーディングではなくロボティクスの授業のため、PC内で終わるのではなく、実際に動かせる教材を選定・使用しているとの説明があった。さらに、インフラ(ここではロボットを使って教室内で行う競技場)の設置は、チームで手作業により作製するなどのアナログの体験も重視している(写真参照)。デジタル(コーディング)とアナログ(現場での実践)の両方を教室内で体験できる工夫がされていた。生徒に質問したところ「ロボティクスの授業は大好き」「将来の社会に必ず必要なので学んでいる」「将来はこれらの技術が使われ楽な生活ができるようになる」と、とても生き生きと話していたのが印象的であった。



コーディングを行い、競技をしている様子

4 おわりに

今回の訪問を終え、シンガポールの公教育は、日本の教育より半歩もしくは一歩「新しい未来の方向へ進んでいる」という印象を受けた。日本と同じアジア圏の中で似た教育制度を採用しており、日本と近い教育問題・課題を抱えながら、それを未来に向けて国と現場の学校で新しいものに変えていこうという意識が非常に高く感じられた。特に国として、自国と他国の「将来の課題」の解決や、自分や他者のために「社会へ貢献」するなど、試験重視の教育からの脱却の試みと、「ウェルビーイング」の実現を目指す施策が実施されていた。これを受け現場の学校・教員が、新しいことに伸び伸びと挑戦し、生徒が主体的・意識的に学んでいる様子が見てとれた。視察中に生徒へのヒアリングを実施したところ、「試験に向けて頑張る」「将来いっぱいお金を稼ぐ」などの返答があり、生徒への意識の変化までは至っていなかったが、シンガポールにおける学校での新たな挑戦や実践は、日本の今後の教育の方向性を考えていくうえで、非常に参考となるであろう。

参考：

「Outram Secondary School」 .<https://www.outramsec.moe.edu.sg/>.2023.9.30

「Ministry of Education Singapore」 .<https://www.moe.gov.sg/>.2023.9.30